

国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（一）

松 本 麻 子

【解説】

国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』は、次のような三八の連歌百韻を集め書写した書である。

- ① 文禄二年五月「あめのひの」何木百韻
- ② 文禄二年五月六日「あつまやの」何路百韻
- ③ 文禄二年五月廿七日「たかにはも」白何百韻
- ④ 文禄二年正月十日「にはくさの」何人百韻
- ⑤ 文禄二年正月十四日「けさのまに」山何百韻
- ⑥ 文禄二年正月十八日「わかになつみし」何人百韻
- ⑦ 文禄二年二月十二日「うめさきて」何人百韻
- ⑧ 文禄二年二月十八日「はなさけと」何人百韻
- ⑨ 文禄二年五月十六日「はやまへ」何路百韻
- ⑩ 文禄二年五月廿日「わかたけを」何人百韻
- ⑪ 天文十八年三月廿四日於大覚寺殿何人四吟
- ⑫ 天文十三年卯月六日追善両吟
- ⑬ 弘治五年八月十一日「たゝならせ」何船四吟
- ⑭ 元龜四年六月六日「はなのときも」何人両吟
- ⑮ 永禄七年正月廿二日「きえしその」懐旧両吟
- ⑯ 永禄五年八月十一日「つきなから」何人両吟
- ⑰ 弘治二年三月廿四日「ゆくみつや」何路両吟
- ⑱ 永禄五年十二月九日於飯盛城何船両吟
- ⑲ 永禄五年三月七日何船独吟
- ⑳ 「みつくさを」何人三吟（安宅冬康・三好長慶・宗養）
- ㉑ 「はなのいろも」何人独吟（宗牧）
- ㉒ 永禄六年仲冬十八日於相模小田原氏康館宗養懐旧独吟
- ㉓ 天文廿一年七月廿六日阿蘇山長善坊契雅興行山何百韻
- ㉔ 永禄八年八月廿二日筑後大鳥井正佐房信芸興行何木百韻
- ㉕ 天正三年三月八日蜂屋兵庫助頼隆興行何船百韻
- ㉖ 天正三年二月廿日於嵯峨大覚寺殿何人百韻
- ㉗ 天正三年二月二日美濃国住西松安親入道興行山何百韻
- ㉘ 天正二年五月八日水野監物丞守隆興行山何百韻
- ㉙ 天正二年六月十日於近江石山世尊院景恵山岡対馬守景雅興行初何百韻
- ㉚ 天正二年六月十一日於江州石山何人百韻

◎31 天正三年正月七日於昌叱何木百韻

◎32 天正四年八月十九日肥後国甲斐左京入道宗柳興行

◎33 永祿九年閏八月十八日肥後天草住妙楽寺秀舜興行何路百韻

◎34 元龜三年九月廿八日於醍醐山舜静院谷無量寿院興行何人百韻

◎35 元龜三年三月十八日於吉野山松室別当何船百韻

◎36 元龜二年八月六日肥後御舟林中務少輔興行山何百韻

◎37 元龜三年七月十三日「あきかぜの」何人百韻

◎38 慈音院前天台座主二品堯然親王御追善独吟

題簽には「寄合連歌」とあり、『百韻連歌集』は整理書名であろう。

これらの百韻は、宗養・紹巴時代の連歌を中心としたもので、特に紹巴の参加した百韻は未翻刻のものが多い。紹巴の参加していない宗養の百韻⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳については、斎藤義光『宗養連歌百韻撰』(一九八九年、私家版)に翻刻が掲載されている。大部な資料であるため、今回は(一)とし、前半の○印で示した①～⑩、⑬～⑮、⑰の紹巴が参加した百韻を翻刻しここに掲載する。◎印で示した百韻は(二)に掲載予定である。

なお、翻刻に際し、仮名遣いと踊り字は底本のママに、旧字は新字に改めた。虫損や汚れ等で判読不明の箇所は□で示した。また諸本にて補うことができた箇所は()で示した。難読語には()にルビで読み方を入れた。

【書誌】

国立公文書館内閣文庫蔵本。所蔵者整理書名『百韻連歌集』。題簽に「寄合連歌」とある。函番、二〇二・二五二。写本一冊。内題ナシ。「浅

草文庫」の朱印。表紙は、藍色無地。本文楮紙。寸法、縦二一・八糎×横二〇・〇糎。本文、墨付一六四丁、一面二三行書、一句一行。遊紙、前後ともにナシ。奥書ナシ。

【翻刻】

① 文祿二年五月 何木

- | | | |
|----|-----------------|----|
| 1 | 雨の日の夕しらするほたる哉 | 紹巴 |
| 2 | しけりにつゝく竹の下道 | 能札 |
| 3 | 卯花のかきねや里をへたつらん | 昌叱 |
| 4 | 水の流の山のかたはら | 玄仍 |
| 5 | さすとみし小舟は波につなき置 | 禅祐 |
| 6 | 月またをそき河風の音 | 友益 |
| 7 | 霧はた、田面の末に晴残り | 禅昌 |
| 8 | □□跡のかりのつら | 禅昭 |
| 9 | □□中空よりも明離 | 景敏 |
| 10 | 時雨にけらし山松のこゑ | 承由 |
| 11 | みるくも雲のけしきのかはりきて | 寿謙 |
| 12 | またき入日のかすかなる影 | 政行 |
| 13 | 涼しさをとめてこそよれ岩かくれ | 札 |
| 14 | つもる雫の水のをち合 | 巴 |
| 15 | 浅沢もたよりに小田や作らん | 仍 |
| 16 | ひとつつたつの山もとの庵 | 叱 |

17 うつしぬる里なからにも住つかて
 18 したはる、こそ都なりけれ
 19 打むかふ雲間の月やかすむらん
 20 風吹たゆる春の明ほの
 21 ほころふる花ふさおもき露見えて
 22 乱れ合たる青柳のいと
 23 河そひのつ、みや浪の超ぬらん
 24 暮ぬるかたに舟よはふなり
 25 柴人の友にをくれし山のかけ
 26 あらしにきほふ□やさゆらん
 27 遠近の月のうき霧立消て
 28 ふしとしらる、さをしかのこゑ
 29 荒わたる田中はしけきむら薄
 30 かたふきつ、も残る草かき
 31 はつかにも夕日や野へにうつるらん
 32 やとりもあへすこてふ飛かふ
 33 春雨のはる、そのふは露ちりて
 34 □□ひまにそよく呉竹
 35 □□きしねの舟や流るらん
 36 浅瀬ながらも水はやき音
 37 分て行石間くゝの道ほそみ
 38 重る母(母)のすゑのかけはし
 39 松かけの落はさひしき寺ふりて
 40 風さそひくるかねのま近き

益 祐 昭 昌 由 敏 昭 昌 益 祐 仍 叱 札 巴 謙 行 敏 由 昌 昭 祐 益
 巴 札 行 謙 叱 巴 由 敏 昭 昌 益 祐 仍 叱 札 巴 謙 行 敏 由 昌 昭 祐 益

41 夜々になれば身にしむ月もうし
 42 はらふもあやな手枕の露
 43 秋の田のふせやはちりにうつもれて
 44 人こそ見えね道のたえく
 45 明過る市の名残の暮ふかみ
 46 汲すてにたるさけのさかつき
 47 限とてわかる、はうき関送り
 48 ほと、きすなく杉のした陰
 49 遠からぬいらかのみねの花落て
 50 霞かたよる滝の白波
 51 長閑なる末はあらしの音羽山
 52 そ、きくし雨すくる空
 53 打なひく竹のは分の明初て
 54 むらにたく火の煙寒けき
 55 冬こもるかけの山かついかならん
 56 雪にしられぬ谷合の道
 57 なつみぬる駒は度々引とめて
 58 かりのやとりも程はへにけり
 59 いつかさてあらためぬへき宮所
 60 □□さやた、木間もる月
 61 □□ときけは色なる落はして
 62 霧のと絶の風そはけしき
 63 出て行舟も汀にこき帰り
 64 沖より汐やみちてきにけん

仍 昭 叱 昌 昭 敏 仍 巴 益 祐 仍 叱 祐 札 敏 仍 巴 益 由 敏 昭 昌 叱 昭 仍
 益 行 由 叱 謙 昌 巴 益 昭 仍 叱 祐 札 敏 仍 巴 益 由 敏 昭 昌 叱 昭 仍

65^ウ 一方は波のうき鳥立さはき
 66 置まよひたる岩かねの霜
 67 刈残す跡しらすけのおれふして
 68 山田のあせやくつれそふらん
 69 なかめ猶ふるの、末は道もなし
 70 心の花の雪つもる袖
 71 園に梅木かけを知らは匂ひにて
 72 枕の夢をさます春風
 73 □□る、や有明かたの雁の声
 74 雲にうかへるをちの山のは
 75 住江や浪にへたゝる淡路島
 76 くる、光に舟とむる袖
 77 かけ高き芦へは夏も忘きて
 78 しはしはかりの道のやすらひ
 79^名 小車のいるへき門もひらきかね
 80 我にしひてたか閨の内
 81 物のけの詞の末もたゝならず
 82 □のうきふしのうらみはかなき
 83 契りしも使からにやたかふらん
 84 秋のあはれをとほぬやはある
 85 かそふれはなきはそひ行玉道に
 86 □□る衣露にしほるゝ
 87 □□も手折れる萩の散はおし
 88 えらひかへたる松虫の声

謙 昌 巴 敏 仍 益 叱 昭 行 祐

89 里遠きふもとの原に求いり
 90 山の栖はいつこさためん
 91 み渡せはなへてさかりの春の花
 92 消間もあらぬ雪の木つたひ
 93^ウ 鶯の朝けを寒み羽吹出て
 94 すそのより先かすむ日の色
 95 水上やとちし氷の残るらん
 96 あくれは白き霜の柴はし
 97 山里は人の往来も稀にして
 98 鹿子たゝすむかた岳の末
 99 夏草の生そふかけは浅からず
 100 うへし早苗の田つらはるけし

紹巴 十一 禅昌 八 能舜 一
 能札 八 禅昭 八
 昌叱 十一 景敏 八
 玄仍 九 承由 七
 禅祐 七 寿謙 六
 友益 九 政行 七

②(文)禄二年五月六日 何路

1 東屋の猶あまりあるあやめ哉 紹巴
 2 雫と絶ぬ五月雨の空 義範

3 螢飛影も露けきよひ更て 昌叱
 4 月また遅き竹のはかくれ 英怙
 5 秋風や端あの袖にをくるらん 玄仍
 6 霧の笹はひまそひにけり 友益
 7 軒近き山はみるく明離 兼如
 8 光うつろふ松の木高さ 景敏
 9 一返時雨ていつち過つらん 玄湖
 10 雪になりたる半天の雲 明宗
 11 昏ぬれは音も嵐のすさひきて 玄佐
 12 入江の波に舟つなく也 能舜
 13 山きはの里は竹にやこもるらん 範
 14 ちりし林のあらはなる色 巴
 15 声絶すふしとの鹿の立帰り 怙
 16 月に目さます小田のかり庵 叱
 17 衣手ははらふも露にぬれくて 益
 18 またしとするも忘れぬ暮 仍
 19 我にしもつれなき人の前渡り 景
 20 やつす車のけはひしるしも 如
 21 たそかれの花にしはしのやとかりて 敏
 22 かすむ山ちや分まよひぬる 湖
 23 (ききすゑ) し鳥のねとむる野を遠み 巴
 24 (かけも) 猶はたしけき草村 佐
 25 いにしへの砌の池は水さひひて 叱
 26 きよめもやらぬ神かきの内 範

27 いつよりか哀まつりは絶ぬらん 仍
 28 乱れしまゝの世々のすゑく 怙
 29 ことの緒のしらへはかたきつたへにて 如
 30 歌のむしろにましはれる人 益
 31 かしこきやいはけなきにもよらさらん 湖
 32 みとりの袖もあらたむる色 敏
 33 程もなく春の限や過けらし 宗
 34 夜は暁のかねかすむをと 巴
 35 月に猶花の下臥名残あれや 仍
 36 夢の行糸の山ほとゝきす 叱
 37 ま木の戸を開出たる朝朗 怙
 38 さえしも風のしつかにそなる 如
 39 玉あられたはしる竹の方よりて 巴
 40 波こそかゝれ河そひの道 湖
 41 絶たるはわたさぬ橋のかたはかり 叱
 42 雲引捨しかつらきの峰 仍
 43 影はまた有明の月の幽にて 益
 44 露をかたしくきぬくの跡 巴
 45 うつり香を身にしめしたふ床の上 敏
 46 はひかくれしにしのひよる中 叱
 47 思はぬをおもふこそたゝあやなけれ 佐
 48 めくみにもるゝつかへくるしも 宗
 49 (いりそむる) 学ひの道もいたつらに 範
 50 (をしむ) 命のみしかきは何 怙

51 人はた、あやし宇治てふ住所
 52 跡こそ残れおく山の庵
 53 かよひちも近き隣の雪の内
 54 いさなはれてやま柴とる袖
 55 くもるかとみるも晴つ、出る日に
 56 みちあへすしも汐や引らん
 57 波間より洲崎遥にあらはれて
 58 あさるもしるき村とりのこゑ
 59 刈田にも残る落ほや朽ぬらん
 60 そよめく秋の風の声のや
 61 しはしたにましろみやらぬ月のもと
 62 そむきくにあかぬ手枕
 63 別るとも後せちきは恨しな
 64 終にと、まる身もわたり河
 65 度々にちいさき舟のさほさして
 66 野へ近からし馬草かふ袖
 67 かこふともあらぬめぐりは荒まさり
 68 板まもり入風のはけしき
 69 松立る軒の鳶のは落つくし
 70 露もさなから時雨めく昏
 71 分帰る小倉の山は霧こめて
 72 さかの、原の秋寒き道
 73 月にしもほのか也ける虫のこゑ
 74 風に乱る、かけの草ふき

巴 益 叱 如 宗 佐 仍 範

75 (なはしろの) 流に花のうかひきて
 76 (やなきに) 残る河上の雨
 77 絶々につ、くつ、みの朝霞
 78 里はみえぬも道の一すぢ
 79 綱なからいつくよりかははなれ駒
 80 かけにいりつ、薪こる山
 81 身を捨ておもふこそた、法ならめ
 82 ちきりぬる世にをくる、はうし
 83 頼めしもななき恨のさ、めこと
 84 あたなるに今みえてくやしき
 85 かへしせぬ文をはなとかと、めけん
 86 遠つ国にや人は住つく
 87 ゆるされん比も過行さすらへに
 88 いつか衣はぬきもかへまし
 89 あつさまた残れる月に立す、み
 90 秋にもくるし閨の蚊の声
 91 露のまの夢より後も明ぬよに
 92 をきし扇そかたみとはなる
 93 旅行も限いまはの門出にて
 94 かり初なれや哀世中
 95 さのみなとさかへを人のねかふらん
 96 おまへちかきや時もうしなふ
 97 かくれ住山は出しの心にて
 98 朽るをま、の谷のかけはし

巴 叱 益 如 宗 巴 湖 益 叱 仍 佑 敏 仍 佑 敏 佑

99 誰ふめる跡は苺(いちご)ちの花の色
 100 岩ねつたひの水の、とけさ
 範 叱

(紹巴) 十二 兼如 九

(義) 範 八 景敏 八

昌叱 十二 玄湖 八

英怙 十 明宗 七

玄仍 十 玄佐 六

友益 九 能舜 一

③ 文禄二年五月廿七日 白何

1 たか庭も五月雨のうちは雲の上 紹巴
 2 茂りをわくる山水の音 定西
 3 刈残す岩ねのま菅そよめきて 昌叱
 4 田つらの秋の月寒き暮 文閑
 5 立鳴の翅や霜をはらふらん 玄仍
 6 うら枯わたるかけの草村 友益
 7 まはらなる垣ほの野への道みえて 景敏
 8 霞に風の吹とをる跡 宗色
 9 朝朗いつくの梅の匂ふらん 底相
 10 日影ほのかに雪消るころ 全波
 11 谷々の流の末の音そひて 重勝
 12 かたへ朽つ、残るかけはし 春味

13 とひよるをいとふ栖やかへぬらん

14 したしき友もおとろへぬ程

15 稀にあふ袖は涙に打しほれ

16 さはり有てのへたてもそ憂

17 □□□□み晴る跡より霧立て

18 □□□□絶も露しくるめり

19 ひまそへは猶冷しきさゝの庵

20 あれしをまゝの小山田の原

21 いつうへてふる野の花のかけならん

22 霞のおくの杉の木高さ

23 時鳥啼かた近き春の昏

24 雨になりたる明ほの、空

25 さよ風の音もや、はたしつまりて

26 舟こき出るうらゝの波

27 山あひに入ぬる海や遠からん

28 けふりにつゝく松のいくむら

29 うす雪は朝けはかりの色にして

30 かりはの道を分て行袖

31 をしか臥夏のやはてもあらさらん

32 なひきそひたる末の草々

33 吹すさふ嵐の後の露しけみ

34 月のかけもる軒の玉たれ

35 残りぬるあつさ忘るゝ端ゐして

36 くるれは袖にかゝる河波

小若

巴

西

叱

益

仍

閑

敏

色

相

波

勝

味

西

巴

閑

叱

益

仍

色

敏

巴

相

叱

- 37^ウ 行々も立さりかたき柳陰
西 仍
- 38 なみ木の花のさかりなる色
仍
- 39 てふ鳥の砌の内にみたれきて
閑
- 40 春また寒き山のかたはら
味
- 41 下萌の野も置霜にむすほ、れ
叱
- 42 氷によとむ浅沢の水
敏
- 43 □□□□き田中のつゝみつきかへて
巴
- 44 □□□□ふまゝの竹のいくもと
相
- 45 夕顔のは隠ふかき露の音
色
- 46 しのふあたりの道たとくし
波
- 47 たのめつる月に心やつくすらん
勝
- 48 よなかさいつら鳥のなくこゑ
叱
- 49 閑の戸の紅葉むしろを敷捨て
益
- 50 汲かさねたるさけのさかつき
閑
- 51^三 かた／＼の袖あまたなる市の場
味
- 52 帰るさいそきよほふ河舟
巴
- 53 水上は宇治の山かけ暮初て
仍
- 54 波の音より時雨ふるらし
益
- 55 苦茨(くまき)の軒の嵐にちる木葉
閑
- 56 窓にさしいる光しつけし
色
- 57 みし夢は跡なき月を俤に
叱
- 58 ひらけはいとゝ露の玉章
西
- 59 槿をゝくるもあたし心にて
敏
- 60 いつしか秋になしはつる中
相
- 61 あかたをはとゝめ置ての司召
巴
- 62 としたくるまでつかへてそこし
仍
- 63 のかるへき世もあらましの世はかなし
益
- 64 引こもりたるいほの哀さ
勝
- 65^ウ 渡す江の舟もくるればほのかにて
色
- 66 吹をろしたる袖の山風
巴
- 67 松のはの雪や晴てもそゝくらん
仍
- 68 雨こまかにもくもる日のかけ
叱
- 69 □□□□猶おしむはかりの駒の音
相
- 70 □□□□るへき歌のましはり
閑
- 71 したひ行人はなさけのふかくして
西
- 72 しのひいれとやをしへぬる宿
益
- 73 いにしへの跡はかはらぬ春の花
巴
- 74 そのふはなれすうくひすの声
敏
- 75 笛竹の声ものとけき折にあひて
閑
- 76 さらに仏やあらはれぬらし
味
- 77 古寺は起るてむかふよはの月
波
- 78 なきを身にしめおもふ行ひ
仍
- 79^名 霧くらく暮ぬる方のかねのこゑ
勝
- 80 猶行末は遠きはつせち
巴
- 81 かりよるもしるへはあらぬとりにて
敏
- 82 たゝくこたへの門のつれなさ
叱
- 83 あやしきは誰にか契かはすらん
閑
- 84 たのむ心もいはけなき人
相

85	かいま見の姿おもふもたゝならて	益
86	それとしるきや小車の袖	色
87	たき物の香にくさくもわかるらし	仍
88	手折かねたる月の白菊	西
89	露霜のふかき笹はかたふきて	巴
90	野分の、ちの夕さひしも	味
91	こにかふもや、虫のねのかれくくに	叱
92	うつりもて行秋のかなしさ	波
93	今 ^ウ こんとなくさめつ、も起出て	色
94	さすらふる身もいたつらになる	巴
95	□□□の中もそねみやふかゝらん	仍
96	□□□かちたるきぬの色あひ	閑
97	花のえをかさしの舞の右左	叱
98	しらへそへたる春のことのね	敏
99	霞ぬる池の汀に舟うけて	益
100	あたゝかけにもあそふをし鴨	西
紹巴 十二	景敏 八	
定西 八	宗色 八	
昌叱 十二	全波 五	
文閑 九	底相 ^前 七	
玄仍 十	重勝 五	
友益 九	春味 六	
	小若 一	

④ 文禄二年正月十日 何人

1	庭草の下よりいそく雪間哉	紹巴
2	池の流のかすむかたはら	政行
3	日くるれば汀の蛙啼出て	昌叱
4	はるかに□□る小田のかたく	仲康
5	梯の行糸の山のかけふかみ	頼純
6	きえぬるうへに霜そふりそふ	玄仍
7	明ほの、月や笹に澄ぬらん	友益
8	戸ほそひらは過る秋風	景敏
9	衣手は残るともなきあつさにて	兼如
10	□□□たふく玉鐙の末	宗色
11	□□□とふ方もわかれす広き野に	祐恵
12	けふもや草の枕むすはん	小梅
13	夢にさへ都は遠く成てきて	行
14	松風絶ぬおく山の庵	巴
15	冬枯の梢つゝ、きの色さひし	康
16	むらくなれや霰せし跡	叱
17	昏初る雲間の月は幽にて	仍
18	天とふかりの啼おつること	純
19	冷しき波は入江の末遠み	敏
20	かた山もとはあらしはけしも	益
21	青葉かつ花の林にあらはれて	色
22	晴てもしけき春雨の露	如

23	朝日さす垣ほの野へにぬるこてふ	巴	47	待わふるみとせも過る中にして	敏
24	そよきしつまるかけの草村	恵	48	こもりし山もいつる行ひ	叱
25	きし根よりおつる雫も氷ゐて	叱	49	みよしのや花より花を分つくし	巴
26	昏行かたの山きはの道	行	50	かけさひしくもかすむ榎原	如
27	月にしもま柴とりてや帰るらん	純	51	春の日も夕の空の鳥のこゑ	益
28	袂涼しき秋になる比	康	52	それかあらぬか行ほと、きす	仍
29	下葉より砌の柳ちり初て	益	53	みしか夜の夢は枕に覚残り	純
30	田中の栖あらはなりけり	仍	54	絶はたえせてないたのむらん	康
31	高かりしつゝ、みの末もくつれ添	如	55	玉の緒の哀かけなん人もいさ	叱
32	河上い□□わかぬ長雨	敏	56	友によりてそことさらに引	巴
33	舟よはふこたへも波にさたまらて	色	57	酒はたゝすゝむるからに汲かさね	如
34	あらしにまよふ遠近の袖	巴	58	遠き門出をおもひやるのみ	敏
35	月渡る尾上は雲にみえかくれ	恵	59	雪深くつもらは駒をいか、せん	恵
36	□□□の寺のかねくらきこゑ	叱	60	よをこめつゝもこゆるあふ坂	行
37	□□□は三輪のひはらに雪ちりて	仍	61	よはひをもやつるゝ袖や忍ふらし	色
38	春ちかゝらし羽吹うくひす	純	62	□□の契はゆるさぬそうき	叱
39	こすのとのあたりしつけくうつる日に	如	63	□□の月は入かたの前渡り	巴
40	霧にぬれたる窓のむら竹	巴	64	霧の内なる小車の音	益
41	侘人のはたへはいかに寒からん	康	65	露ふかみ宇治のかよひち分々て	仍
42	うちしきりぬるあさのさ衣	益	66	身にしみけりなすさふ河風	純
43	松風の雨に板間の月もりて	叱	67	ねふる間もなみの舟長はらひかね	叱
44	かたしきかふる手枕の露	色	68	そゝくあまりやみのもか□ぬ	巴
45	契りしを頼もあたの哀しれ	行	69	一むらの雲にしはしの夕日影	康
46	忘れはつるこの比のうさ	恵	70	先立跡のからす啼也	如

71 霜寒き松やひゝきも添けらし
 72 たく火幽に絶ぬ柴の戸
 73 しつか行田つらの道は山かけて
 74 明るあさけの霧のひま〜
 75 ほのかなる月にをしかの声遠み
 76 色にかくるゝ野への草ふき
 77 蓬生も昔に帰る花咲て
 78 猶わすられぬ捨し世の春
 79 立のほる霞の谷の憂名残
 80 をしへはてぬはまとふ山道
 81 入相のかねなる方や里ならし
 82 竹の葉分のおくふかきかけ
 83 河くまは乱れあひつゝ飛蜚
 84 天つ星をもうつつ下水
 85 菊はたゝ月出ぬまの色にして
 86 袖にそのふの露こほすくれ
 87 吹まゝに冷になる風の音
 88 □□ならぬ身はとさしかたむる
 89 □□人もいとふはかりに庵ふりて
 90 所かへたるかくれ家の道
 91 したふやと心みるこそ世の行ゑ
 92 つれなさはたゝ猶くらへまし
 93 物のけはいのるもさらにおこたらて
 94 日々にうらみのつもるはて〜

益 恵 敏 色 行 仍 叱 康 益 恵 巴 叱 仍 敏 純

95 をろかさの学こそ身のとかならめ
 96 うけてもそむくいましめの道
 97 盃に心のほともむすほゝれ
 98 あかぬかりはの婦さ忘るゝ
 99 しはしとや雨にやとかる花のもと
 100 木の間もあらぬ松の藤かえ

⑤ 文禄二年正月十四日 山何

1 今朝のまに消しや霞む峰の雪
 2 こそまきあくる袖の春風
 3 梅かえの誰軒端より匂ふらん
 4 (かき) ほつゝきの竹なひくかけ
 5 (いけみつ) もけふりの末は明初て
 6 波にうかへる月かすかなり
 7 しはし猶秋の蛍や残るらん
 8 こほれし跡も露の草々

紹巴 友益 景敏 兼如 宗色 祐恵 小梅 景敏 兼如 紹与 景敏

- | | | | | | |
|-----------------|-----------------|----|-----------------|-------------------|---|
| 9 ^ウ | 風の音た、一とをり吹すて、 | 玄湖 | 33 | とひよるも世をのかる、やいとふらん | 由 |
| 10 | 行こそすくれ山あひの道 | 承由 | 34 | たれも心の花になるころ | 巴 |
| 11 | 梯やくつるとみるも絶さらん | 盛政 | 35 | 春はた、霞む野山を住所 | 生 |
| 12 | わつかにすめる木隠の里 | 秀益 | 36 | かひなれにたる鳥のさへつり | 叱 |
| 13 | 汲よるや岩の雫のたまり水 | 信 | 37 ^ウ | せきとむる流の末はひろかれや | 信 |
| 14 | あれしも作る小田のかたはら | 巴 | 38 | 田面浪こそ五月雨のうち | 仍 |
| 15 | 草むらの茂り残らす刈はらひ | 生 | 39 | 夏に猶乱れそひたるむら柳 | 如 |
| 16 | 野へのいつくかをしか立道 | 叱 | 40 | 涼しきま、に休らへる道 | 与 |
| 17 | 霧間よりかた山もとの明離 | 如 | 41 | さし入も遠山寺はしつかにて | 巴 |
| 18 | かねほのかなる秋の半空 | 仍 | 42 | 板間の月にね覚する床 | 由 |
| 19 | やとりをもとはん行糸の月出て | 敏 | 43 | 昔おもふ涙も露も袖の上 | 叱 |
| 20 | 晴てはそ、く雨のいく度 | 与 | 44 | 人の心の秋そかなしき | 生 |
| 21 | さかりそとみれはうつるふ花の色 | 由 | 45 | かた見とは置もあたる扇にて | 敏 |
| 22 | 砌をよそのうくひすの声 | 湖 | 46 | 待にほとふる旅のかへるさ | 湖 |
| 23 ^二 | 谷の戸はあけても遅き日の光 | 巴 | 47 | 栖猶たへかたきまで荒渡り | 政 |
| 24 | うすき氷もとけぬ河水 | 政 | 48 | 冬のおくするあらしはけしも | 叱 |
| 25 | 下折の芦の枯はは置霜に | 叱 | 49 | 都にも雪をみ山はいかならん | 仍 |
| 26 | 田中の道そかよふ跡なき | 信 | 50 | 野へのわかなは摘もすくなし | 巴 |
| 27 | 爰かしこ鹿子やかりもつくすらん | 仍 | 51 ^三 | 袖はたた、去年にかはらぬさむさにて | 与 |
| 28 | をくれし友もかへり行袖 | 生 | 52 | けふり消ても里そかすめる | 信 |
| 29 | さひしさや草の庵の月の暮 | 与 | 53 | 一筋の行末遠き水無瀬河 | 叱 |
| 30 | (あき)にそかはる松風のこゑ | 如 | 54 | よとみもあへすおち滝つ波 | 敏 |
| 31 | (むすふ)手の水もや、はた冷に | 湖 | 55 | おしむにも秋は木葉に暮はて、 | 巴 |
| 32 | 岩やの内に引こもる道 | 敏 | 56 | すみのほりぬる山のはの月 | 政 |

57 露にしもしくる、雲の晴渡り
 58 下ぬしかりも空につらなる
 59 みるくも田つらほのかに明過て
 60 冬までのこるす、きいく村
 61 かき内やまよふも霜の薄からん
 62 よはのかくらの庭火たく跡
 63 暁にうつろふ星はさやかにて
 64 末もたとらすこく沖つ舟
 65 満汐に高き洲崎もしつむらし
 66 松の木の根や朽てかたふく
 67 ふりにたるいらかの軒は^(三)苺むして
 68 車もちりのつもりぬる門
 69 つかへこしよはひや稀の程ならん
 70 世々のおきてを知らかきこき
 71 やすからぬ法のをしへをうけつきて
 72 わかたつ袖の行ゑあらずや
 73 分て入よもきかもの道細み
 74 虫の音えらふ袂露けし
 75 おもほえず月みつ、よは更々て
 76 吹出にたるあらし冷し
 77 ちる花やあまきる雪にまかふらん
 78 夕の色をいそく春雨
 79 東屋のまやも霞の戸さしして
 80 かへりつくせるかけの山人

信 仍 巴 叱 如 生 由 敏 仍 政 湖 巴 叱 信 与 如 生 叱 巴 由 仍 湖 如 生

81 乱つ、国も治る折にふれ
 82 絶しもさらにおこす神事
 83 限あれはぬき捨にける藤衣
 84 いなはもる身もやすめぬるいほ
 85 月になる枕にしはしよりふして
 86 あた、め酒や酔心なる
 87 くる、まで小たか狩はを別かね
 88 のる駒いそく道のへのすゑ
 89 へた、りし都も今は近つきて
 90 かたくに住家も数そふ
 91 流ぬるかけひの水やつ、くらん
 92 うへし早苗の山田はるけし
 93 さりともと待程しれな子規
 94 夢のなこりをしたふ明ほの
 95 梯はまたみぬ人に行こ、ろ
 96 た、ならさりし文の一筆
 97 ゆるされんことをし思ふ左^(ま)迂に
 98 世のたのしみも命也けり
 99 いく春も咲にあふへき花の宿
 100 庭は若木の桜さかふる

昌叱 十二
 助信 八
 紹巴 十二
 景敏 八
 紹与 八
 玄湖 八

仍 生 与 湖 如 叱 巴 信 生 敏 仍 与 政 如 湖 巴 叱 生 敏 由

生 十一句 承由 七
玄仍 十 盛政 六
兼如 九 秀益 一

⑥ 文祿二年正月十八日 何人

- 1 若な摘し雪間とめ行子日哉
- 2 霞にまじる袖のいろくく
- 3 久かたの雲井の庭に春立て
- 4 箔(ふだれ)をまけは光のとけし
- 5 雨は猶峰より遠に晴渡り
- 6 音あらましきよはの山風
- 7 月に猶夢も結はぬかり枕
- 8 うつろふ草を野へのかたしき
- 9 夕々聞こそあかね虫のこゑ
- 10 涼しきかたに立出る道
- 11 軒近き竹の葉伝そよき合
- 12 とけて雫もふかき朝霜
- 13 日の影は雲のまにくいさよひて
- 14 ほのかに鳥の啼つれて行
- 15 山もとの林つゝきや暮けらし
- 16 あらしのさそふかねさやか也
- 17 よをこめて月にそ出し泊舟
- 18 かたへ霧ふる沖つ白波

紹巴 嘉昭 昌叱 玄仍 忠長 玄春 誓忍 既在 景敏 春慶 宗頓 慶純 乘昌 了照 惠意 小若 仍 巴

- 19 うら遠み秋の時雨や過ぬらん
- 20 一つらかりの羽吹行こゑ
- 21 明はては花にこゆへき山高み
- 22 霞のうちの末のうき雲
- 23 二 すすひにしあらしの音も春めきて
- 24 つもるともなき雪の呉竹
- 25 袖やたゝま柴とりつゝ帰るらん
- 26 里はむかひによはふ河舟
- 27 そことしもわかすたく火の影みえて
- 28 雨に螢やうち乱るらん
- 29 月遅き木の下草の露しけみ
- 30 吹くる風のやゝさむくなる
- 31 旅衣うちきせはやと伝待(つて)
- 32 都出しや遠さかる跡
- 33 うつり行日数は程もなかるらし
- 34 あらためつくる神かきの内
- 35 乙女子の引まゆすみはほのかにて
- 36 夕のおくにことのねそする
- 37 舟よせて帰るたよりや須磨の浦
- 38 独かなしきかけの山住
- 39 いほちかみつまとふ鹿の声たてゝ
- 40 外面ののへの小菘さく比
- 41 よなく月に月もうつろふ秋淋し
- 42 身はかたはらのさむしろの露

春 叱 在 長 純 忍 慶 敏 照 頓 巴 昌 叱 意 長 仍 春 在 忍 慶 仍 巴 敏 叱

43 あた人の夢の倂なこりあれや
 44 ひ、きそひつ、高き松風
 45 暮初るいそには波のかけてきて
 46 つなき置ぬるあまのつり舟
 47 山あひのけふりに村やこもるらん
 48 いくへはかりのかけはしの霜
 49 春を待心の花の岩かくれ
 50 若木なからに梅にほふ也
 51^三 風はまたかすむともなき朝朗
 52 なかれし跡の氷の河上
 53 すき残す田中や水もせかさらん
 54 さとはなれなる道の絶々
 55 飼捨る馬草はみとり重りて
 56 ひとりこほる、をの、夕露
 57 我なくはたれかは玉も祭らまし
 58 哀もうさも月のみぞ知
 59 あはてしもいくたひ帰る袖ならん
 60 をしへし宿も求かねけり
 61 かた、かへまたいはけなき使にて
 62 はかなきは名の世にそもれぬる
 63 ことはりをた、さはいかてさぞふらん
 64 たのみしかひもあらぬ後見
 65^ウ かこひつるよもき葎も冬枯て
 66 立枝もしるき梅の一本

敏 叱 春 在 忍 敏 叱 長 在 仍 意 頓 純 叱 巴 慶 昌 小梅 頓 巴 春 意 長 在

67 おもはずも春やとはる、友ならし
 68 枕に近きうくひすの声
 69 かけは猶かすめる月の明やらて
 70 雨けもよほす風の中空
 71 舟やた、入江の波にうかふらん
 72 汐みつさかひあしへへたつる
 73 とりくりに鳴立かたの跡遠み
 74 別をしたふ玉銚の末
 75 又とはんけはひならぬを恨侘
 76 捨てもおもふうき世とをしれ
 77 なかめつ、花に忘る、わかよはひ
 78 かすみをくめる袖の度々
 79^名 永日もをくる関ちにくらしはて
 80 ともにわかれをおしむ旅人
 81 なさけ猶かり初臥に浅からて
 82 よそ目しのふはやまぬくるしさ
 83 折々は物のけめくをいか、せん
 84 絶いるほとのおもひあはれめ
 85 さかしらはおやさへさくる中にして
 86 出なはうちのととりならまし
 87 晴とをる雪もみるくかきくらし
 88 かたふくま、の月の山のは
 89 暁は鳴の羽かき数そひて
 90 ぬるほとやなきをしねもる袖

春 長 昌 慶 巴 仍 叱 在 意 巴 純 敏 頓 叱 長 春 忍 純 仍 昌 巴 意 慶 在

- | | | | | | |
|----------------|---------------|------|----|----------------------------------|----|
| 91 | 草ふきははらひ侘らし秋の霜 | 叱 | 91 | 雪やた、昏行ま、につもるらん | 玄仍 |
| 92 | 風もたまらぬ軒のひま | 仍 | 6 | あらしの後の月のさやけさ | 禪祐 |
| 93 | かしたる竹の末々方よりて | 巴 | 7 | 秋の雲まよふ跡より晴とをり | 禪昭 |
| 94 | くつれしつゝみ波やこえけん | 敏 | 8 | 翅はなれず雁渡る空 | 光清 |
| 95 | はるくと舟の綱手を引のほり | 頓 | 9 | 杳 <small>ほろむ</small> なる田つらも色に成初て | 景敏 |
| 96 | よとの、道を入帰るくれ | 叱 | 10 | 人の往来もしけき里々 | 慶広 |
| 97 | 俄にも時雨きにける伊駒山 | 在 | 11 | 袖はた、涼しき方にいさなはれ | 右能 |
| 98 | みるか内より雲かゝる峰 | 純 | 12 | おく猶ふかくひく竹のは | 玄陽 |
| 99 | 花さかり霞晴るれは顕れて | 仍 | 13 | 一むらやけふりの内にこもるらん | 寿忍 |
| 100 | 袖にあかなきすみれ幾本 | 慶 | 14 | 流もほそき水の水上 | 乗昌 |
| | | | 15 | 雨は今けしきはかりに晴渡り | 高正 |
| | | | 16 | 夕日すくなき山のかたはら | 能舜 |
| 紹巴 十一 | 誓忍 五 | 乗昌 五 | 17 | 蝸の声する方の月待て | 叱 |
| 嘉昭 一 | 既在 八 | 了照 二 | 18 | 霧の雫に袖はぬるめり | 巴 |
| 昌叱 十一 | 景敏 七 | 惠意 六 | 19 | 身にしめて思ふあたりの門の前 | 祐 |
| 玄仍 九 | 春慶 七 | 小若 一 | 20 | 及ぬをしもおもふくるしさ | 仍 |
| 忠長 七 | 宗頓 六 | 小梅 一 | 21 | 守かけの花のさかりも過けらし | 清 |
| 玄春 七 | 慶純 六 | | 22 | そのふをよそにうつる鶯 | 昭 |
| | | | 23 | 谷あひは明る朝日の長閑にて | 広 |
| ⑦ 文禄二年二月十二日 何人 | | | 24 | とくる氷のけふる河上 | 敏 |
| 1 | 梅咲て匂ひ外なる四方もなし | 義光 | 25 | 霜こそはかさなりにける橋ならめ | 陽 |
| 2 | いくへ霞のかこふかき内 | 守棟 | 26 | 行人みえぬ寺のさし入 | 忍 |
| 3 | 春ふかきかけの山畑道みえて | 紹巴 | 27 | 野をかけて茂りそひぬる道の末 | 昌 |
| 4 | 絶たるも猶かけはしの末 | 昌叱 | 28 | 虫の音をしも聞や初けん | 正 |

- 29 月になる砌の内の暮渡り
露置にたる窓の呉竹
能 舜
- 30 波こゆるきしねの舟に苦茨(とまがき)て
巴 能
- 31 うら風はけし明やらぬ山
叱 巴
- 32 松原や尾上につゝかけならん
仍 叱
- 33 うす雪ふれる遠近の空
祐 仍
- 34 かり人の袖の帰さは暮はて、
昭 祐
- 35 声をしるへに駒やかふらん
清 昭
- 36 里近きあたりなからも道細み
能 清
- 37 おとろへにたるやとの哀さ
巴 能
- 38 藤かえや春の名残と折もおし
叱 巴
- 39 霞によする池のさゝ波
昌 叱
- 40 糸竹のなかき日くるゝ舟の上
敏 昌
- 41 つりたれにしも立帰り行
仍 敏
- 42 風は猶音あらましく吹落て
正 仍
- 43 すき間かちなる柴の戸の内
昭 正
- 44 有明の月を枕のさむしろに
忍 昭
- 45 はらひもあへぬ衣手の露
陽 忍
- 46 いつしかに秋になされし中はうし
祐 陽
- 47 人の心は花よもみちよ
叱 祐
- 48 あらそふもさすかゆへある和歌
巴 叱
- 49 うしろみからに学ひこそすれ
舜 巴
- 50 国々のまもりなるへき身はしるし
仍 舜
- 51 いはけなきよりつかへぬる袖
祐 仍
- 52 哀むやをもきとかをもゆるすらん
陽 祐
- 53 かすもおほえすくめる盃
能 陽
- 54 老にたるとしてもはやすまはりに
叱 能
- 55 仏の御名もすめるよのこゑ
巴 叱
- 56 くもりなき月の光に打むかひ
昌 巴
- 57 おもひ出けり故郷の秋
正 昌
- 58 露ふかき野を分衣しほれきて
清 正
- 59 袖の小萩にをくる夕風
敏 清
- 60 鹿の音や栖の方に近からん
昭 敏
- 61 とふ人あらぬおくの山かけ
広 昭
- 62 さひしさを猶はたそふる雪にして
舜 広
- 63 朝市はたちすかりたる里離
巴 舜
- 64 日影を袖にねふる舟長
仍 巴
- 65 波の音風につれつゝ絶はて、
祐 仍
- 66 つゝみの滝もときや過らん
叱 祐
- 67 秋の夜も明行ふるの神かくら
敏 叱
- 68 さゝのくまにや月もうつろふ
陽 敏
- 69 霜になほ啼よりはりたるきりくす
忍 陽
- 70 暮ぬるまゝの袖のかたしき
昌 忍
- 71 又も夢うつゝにたのむ袖の□□
叱 昌
- 72 みし俤は忘れぬのみ
昭 叱
- 73 づらきこそ別し後の思ひなれ
能 昭
- 74 道の行ての人の音信
巴 能

15 霧深きもりの下道絶々に
 16 ゆふ四手朽て残る神かき
 17 御被せし河せの波の行ゑあれや
 18 おもひやまんの心もそうき
 19 及ぬにかくるたのみはいやはかな
 20 文の返しはいつかみてまし
 21 出てよりたよりも稀の旅にして
 22 しらぬ国にぞ住つきにけり
 23 ともなへはゆかりならねと猶床し
 24 いさなはれつゝつかへぬる袖
 25 小車の跡たちつゝくから衣
 26 かりはの野へや杳（はるか）なりけん
 27 鳥のなくかた山もとは明残り
 28 また越やらぬ関の戸の道
 29 ぬれくゝん波いか斗すゝか河
 30 雨のなこりの水かさます音
 31 流てや絶たるまゝの橋ならん
 32 ゆき、も見えぬ一むらの里
 33 かねひゝく松よりおくの暮果て
 34 落はのうへの月のさやけさ
 35 雪はたゝそゝきもあへす晴返り
 36 今朝やみ谷も出るうくひす
 37 かすむ野にうつる光は春めきて
 38 かきねの水の氷とけ行

政 叱 仍 益 与 敏 意 陽 由 純 能 敏 巴 仍 叱 与 益 与 敏 純 由 陽 意 敏 与 益 仍 叱 政

39 苗代はしつか前田のかたはらに
 40 ふみ初つゝも道そよきたる
 41 しるへ今忍ふあたりををしへすて
 42 たゝく戸さしのこたへあやしき
 43 よむ歌にとしふる恨いひつくし
 44 命のあるをあふせともしる
 45 さすらへもゆるさをうる時待て
 46 そむる衣や色をそふらん
 47 みしかよの月をそしたふ酔心ち
 48 枕もとらしはなにかるやと
 49 春とても一こゑはなけ子規
 50 ふる野の田つらすぎ渡す比
 51 つもりぬる山も残らす雪消て
 52 庭まですめる水の水上
 53 風吹は波の萃（うきくさ）かたよりに
 54 秋の螢のかけは涼しも
 55 村雨の音せし庭の露ふけて
 56 月におとろくかたしきの夢
 57 契つゝよその帰さを待もうし
 58 などふた道になれる心そ
 59 つれなさの恨に中は絶もせて
 60 したふを後のおやも哀め
 61 よしあしをわかたんもまたいはけなし
 62 ならばしゆかん舞のあしふみ

仍 能 巴 益 叱 敏 意 陽 与 叱 政 能 巴 益 与 敏 意 陽 与 叱 政 由 叱

63	いとむこそ豊明のすかたなれ	仍	87	ほのかなる芦屋を近み汐満て	由
64	つほねくのしるき袖くち	巴	88	霧分てしも人帰るみゆ	仍
65	焼物は猶しなくの匂ひにて	与	89	月にたゝえらひつくせる虫の声	益
66	あさけの枕たれになれけん	能	90	今はといひてふしとさたむる	能
67	たはつけし筋ともあらぬ乱髪	陽	91	とはれぬを夢になせとのさよ枕	叱
68	露にぬれぬる青柳の糸	敏	92	いかにしてかはうきを忘ん	陽
69	羽よはきこてふも花を求きて	益	93	いちはやき世とは知てもかゝつらひ	与
70	笛しつかにかすむ鳥の音	仍	94	あふやと時を待かくるしき	巴
71	落行をせく池水やよとむらん	巴	95	笛のねもことのしらへにたとられて	敏
72	あるゝめぐりを田にそほりなす	純	96	御階のもとへたてある袖	叱
73	みし跡はやふしかくれの栖にて	叱	97	心のみ行ておりけり花の枝	仍
74	しほれはてたる霜のあさかほ	政	98	風のたひくをくる梅か香	政
75	秋の日の出るやはやき空ならん	意	99	うらゝなる夕は窓をとちやらて	純
76	月にむかへは長夜もなし	由	100	霞の内の山はつかなり	益
77	おもふとちまろひあひつゝ枕して	仍			
78	名はもらさしのちかひたかふな	益			
79	えにしとてかれくなるは世のならひ	能			
80	しゐてもとめは法もつたへん	巴			
81	かりそめに雲の林を分入て	敏			
82	ちるに紅葉そたのむかけなき	意			
83	時雨くる程は立よる松高み	政			
84	くもりの内や雪の峰雲	叱			
85	かりかねのをくるゝ跡は遠き江に	巴			
86	くるれはあらし波の秋風	与			

⑨ 文禄二年五月十六日 何路

- 1 は山さへ今しけ山の若は哉 興山上人
 2 雨晴る野は夏草の露 昌叱
 3 沢水の流涼しき月出て 生
 4 田中の道の袖のかへるさ 紹巴法橋
 5 幽なる里のかたへや暮ぬらん 玄仍
 6 置霜しろき竹の末々 友益
 7 ね所を定かねつゝ鳥鳴て 文閑上人
 8 日はをちかたのあらしはけしき 紹与
 9 立まよふ雲のまかひの山高み^ウ 景敏
 10 をくるゝ袖の尋行跡 宗色
 11 道やたゝ駒にまかせていそくらん 底相
 12 杳^{はるか}なる野は末もわかれす 小君
 13 聞か内に夕のかねの声絶て 叱
 14 霧よりおつる松の下風 山
 15 秋ふかき山や時雨てきにけらし 巴
 16 目覚すよはの冷しき床 生
 17 月にしもふるき枕をゝしやりて 益
 18 忘れし中の人香もそうき 仍
 19 衣手は涙に朽やはてなまし 与
 20 昔をおもひすめるよもきふ 閑
 21 いつうへて残れる花のかけならん 色
 22 霞分いるふるの神かき 敏

- 23 一声をしたふや春の郭公^二 生
 24 夢より後も明やらぬ空 相
 25 かそふれはうさもいくよかかわるらん 山
 26 ふるかる方とをとつれぬ宿 叱
 27 住捨る門は葎のうちにして 仍
 28 かたふくかけに松虫のなく 巴
 29 朝霧にまた入はてぬ月さひし 閑
 30 あは鳥とをき秋のうら波 益
 31 引汐にさそはれて行あま小舟 敏
 32 吹そふ音の高き夕風 与
 33 あらにはにも笹の梢落はして 叱
 34 山のは寒みうつる日の色 色
 35 初雪やふる跡よりも消ぬらん 巴
 36 竹うちそよきむら雀鳴 山
 37 人みえぬ田面の末の草の庵^ツ 相
 38 あるかなきかにつゝく通路 生
 39 河橋の朽たる方は水かくれて 益
 40 浅せもいさや五月雨の比 仍
 41 山あひはいくへ下ある雲ならし 与
 42 花にうつめる春の鳥の音 叱
 43 くるゝよも匂ひはしるき梅咲て 色
 44 窓のひまもる風のゝとけさ 巴
 45 独ぬる栖ともなき月のもと 山
 46 かた見とたのむ手枕の露 敏

47 旅なるに衣はいつかうちきせん
 48 ゆるす限をまつはさすらへ
 49 かしこきの心を文にかきつくし
 50 もろこしのよのをしへしらるゝ
 51^三 松たてる高野の奥も道有て
 52 あらしの雪はたかはらひけん
 53 御狩はの跡になりたる馬の上
 54 こなたかなたの小車の袖
 55 契たゝあためくは憂人心
 56 いかにたのまん言葉の末
 57 物思ひ今はのきはとあらはして
 58 しのふ別の明るあやなさ
 59 よこ雲も夢の行ゑの名残あれや
 60 かたしく月に過るかりかね
 61 舟つなく入江も広き秋の水
 62 芦へほのかにかり渡す跡
 63 一むらの霜のふか田や残るらん
 64 冬もをしかの里ちかきこゑ
 65^ウ 春日野やふもとのさかひへたゝりて
 66 霞もやらぬまのかく山
 67 白妙によも明かたの花さかり
 68 うくひす羽吹月のしつけさ
 69 春雨の音はしられぬ空晴て
 70 小家の軒端けふり立なり

仍 閑 叱 益 仍 巴 生 色 敏 叱 巴 山 相 益 色 敏 与 閑 叱 生 仍 巴 益 叱 閑 仍

71 夕顔の色もわかぬたそかれに
 72 かさす袂はあやし行すち
 73 はちかはす心の程のいか斗
 74 またいはけなき文の墨つき
 75 品々を知かたきこそ歌ならめ
 76 木々にみせたる春秋の程
 77 藤かえにまはる松のつた紅葉
 78 岩ほのかけの雫露けし
 79^名 いけ水も月更ぬれは音澄て
 80 氷をくたく波のをし鳴
 81 去年よりの寒さ今はた絶けらし
 82 霞こめたるすみかまの道
 83 ふむ跡を大原山の雪間にて
 84 わくれは袖にさくらちるかけ
 85 青柳の梢かたよる庭広み
 86 吹とをりたるこすの朝風
 87 ふるとしもきゝたにあへぬ雨そゝき
 88 秋もしはしはあつさ残れり
 89 月までは戸さしの外に立出て
 90 ちきらぬ暮を日くらしの鳴
 91 袖の露や身にしむ色にこほるらん
 92 ぬきかへなんもうき藤衣
 93^ウ 一度は捨にし世にも帰りきて
 94 あかしの波のへたてはるけし

敏 巴 相 仍 叱 敏 相 山 生 色 益 叱 与 閑 仍 巴 色 生 山 与 閑 相 巴 敏

- 95 友をしもまとはす声や村衛
96 さよ風さゆる霜の芦のや
97 草枕かりよる旅ねあかしかね
98 夢も都は遠さかりけり
99 花さけは心よりいる山のおく
100 つれ／＼にさへをくる春の日
- 興上人 九 文閑上人 八
昌叱 十二 紹与 八
生 九句 景敏 九
紹巴法橋 十一 宗色 八
玄仍 十 底相 七
友益 八 小若 一
- 1 若竹をみればしけらぬ草木哉 雲
2 そのふも野へも五月雨の露 春
3 螢とふかけは涼しき流にて 池
4 まつよひ過る月の河上 紹巴
5 せのこゑはいくへの霧にむせふらん 白
6 風しつまれる秋の山本 杉
7 丘越の道の紅葉はちりつくし 日野新大納言
8 夕霜しろき松の村立 昌叱

- 9^ウ いつくにか鳥のやとりを求らん 広橋中納言
10 往来も絶ぬ里のかたはら 右衛門督
11 はるかにも返す田面の明離れ 光豊
12 氷とけそふ水のすゑ／＼ 玄仍
13 もえ出る野沢の草の浅みとり 景敏
14 空にいくたひ雨そゝくらん 賢好
15 月は今霧のまかひの影見えて 春
16 幽に過る初かりのこゑ 雲
17 旅なるを思ひやりてやうつ衣 巴
18 夕々の秋のあはれさ 池
19 砌さへ野と成斗里は荒て 杉
20 つゝきつゝかぬ草むらの道 白
21 行駒の跡をも花やうつむらん 叱
22 春のあらしのすさふせき山 日
23^二 空はまた霞もやらぬ朝朗 右
24 竹のは末のあは雪の色 広
25 よせ帰る波やつゝみを越ぬらん 仍
26 浅見も渡す河つらの舟 光
27 里人のま柴にかよふ道遠み 雲
28 夏なき方や谷の戸の山 敏
29 一とをりふかき木陰の風過て 池
30 松かね枕夢はさめけり 春
31 露霜をかたしく袖はぬれまさり 白
32 板間もり入月のあかつき 杉

⑩ 文祿二年五月廿日 何人

- | | | | | | |
|-----------------|----------------|---|-----------------|------------------------------------|---|
| 33 | たへたるをとはれぬ宿の秋淋し | 日 | 57 | ひまぐに霧の笹の水晴て | 日 |
| 34 | たれにかみせん花の草々 | 巴 | 58 | さすかに跡を残すしほかま | 巴 |
| 35 | 分ならず野へは虫のね鹿の声 | 叱 | 59 | 賀茂河やわかる、末も絶やらす | 杉 |
| 36 | 小倉の山のかけや暮けん | 仍 | 60 | 中の契も神やたのまん | 広 |
| 37 ^ウ | 吹出る嵐の雲の時雨きて | 広 | 61 | 年へてもつらさはおなし心にて | 敏 |
| 38 | 落はの跡に残る木高さ | 雲 | 62 | 涙に猶もおもひよはれる | 雲 |
| 39 | 立ならふひはらに寒き入日影 | 敏 | 63 | したしきは門出をしたひしたはれて | 右 |
| 40 | しのきくくて岩つたふすゑ | 白 | 64 | いつかはかへりあふさかの関 | 叱 |
| 41 | をくれしと旅行袖やいそくらん | 光 | 65 | おしむこそ都の内の春ならめ | 巴 |
| 42 | 明る波間にうかふ江の舟 | 池 | 66 ^ウ | ちれば花さへ青柳の色 | 杉 |
| 43 | 鐘の声枕に遠き難波かた | 杉 | 67 | 永日もおほえぬまりの場 <small>(ま)</small> にして | 春 |
| 44 | 芦の一夜の月の下臥 | 叱 | 68 | むかしさそなの御幸なりけん | 白 |
| 45 | こ、かしこ田中の鳴の床かへて | 巴 | 69 | おやと子のた、しき道は絶ぬよに | 叱 |
| 46 | 度々秋の風そはけしき | 右 | 70 | つたへもてこし歌のかしこさ | 日 |
| 47 | 村雨の名残の露やこほるらん | 仍 | 71 | 後はた、心つからの学ひにて | 光 |
| 48 | 消ての跡の雲の絶々 | 日 | 72 | か、けそへたるよはのともし火 | 池 |
| 49 | 峰つ、き花の限はかすむなよ | 春 | 73 | 松の戸に更ても遅き空の月 | 広 |
| 50 | 春の日もや、をちかたの松 | 杉 | 74 | うきはとはれぬ床そ露けき | 敏 |
| 51 | 中空はさえ残るかと雪ちりて | 叱 | 75 | 独きく哀はしらし荻の声 | 仍 |
| 52 ^三 | またほのかなる鶯のこゑ | 光 | 76 | 身にしめ思ふ人の行末 | 右 |
| 53 | 夏きてもいかにつれなき郭公 | 白 | 77 | 倅や夢うつ、ともわかさらん | 雲 |
| 54 | 草の庵の夕あけほの | 春 | 78 | 明はてぬよりいそく帰るさ | 巴 |
| 55 | あかす猶なれくてみる秋の月 | 池 | 79 | あら玉の春を隣のかた、かへ | 杉 |
| 56 | さけはうつろふあさかほの色 | 仍 | 80 ^名 | 月をも日をもえらふうらかた | 春 |

81 皇すべらぎのをこらぬ代のまつりこと
 82 国の司もかきりこそあれ
 83 舟路さへゑそか千鳥はへたゝりて
 84 東風吹風はかすむしの、め
 85 軒近き袂に匂ふ梅の花
 86 こと、ひきぬる蓬生の春
 87 日のうつるあたりは蝶の去やらて
 88 野もかた分る露のしつけさ
 89 色なるを残す草刈心あれや
 90 あらし置たる秋のふる畑
 91 月のみは住なれにける庵の内
 92 音信絶し暮はわひしも
 93 またれつる後の朝の文もいさ
 94 使も遠き宇治の中道
 95 春日野やかすむ行糸の袖ならん
 96 かたよりなひく若草のかけ
 97 乱つゝしつえをつたふ花の露
 98 雨に翅やうくひすとなく
 99 けふのみの春こそ春としたふらめ
 100 仏なき世も法に在る門

日 仍 巴 雲 杉 春 白
 日 仍 巴 雲 杉 春 白
 池 叱 広 雲 巴 日 敏 春 白 光 池 叱 広 雲 巴 日

紹巴 九 右衛門督 六
 白 八句 光豊 六
 杉 九句 玄仍 八
 ⑬ 弘治五年八月十一日 何船
 1 立ならせ月も峰行鹿鳴草
 2 朝霧わたる岳の辺の道
 3 秋の風たか軒はより時雨らん
 4 ははけにつゝく里の村竹
 5 一筋の流のすゑは橋見えて
 6 岩ねくの水くゝるをと
 7 しけりそふ木間も母こぼの浅緑
 8 ふるえの柳春も暮けり
 9 帰るへき折とやしる鳥も打羽吹
 10 雨になりつゝ、永日の空
 11 泪さへむかし語のかすゝくに
 12 かこつに近きゆかりしるしも
 13 人伝はおもふ恨や残すらん
 14 あらぬ情のまことしもなき
 15 音信や道のたよりの前渡り
 16 蓬生なからみればみしやと
 17 ふかくなる秋とは露を払かね
 18 杳ほろかなる野を月に行袖

蒼 金 蒼 金 蒼 養 巴 蒼 金 蒼 養 巴 蒼 金 蒼 養 巴 蒼 金 蒼

- | | | | | | |
|----|----------------|---|----|------------------------------------|---|
| 19 | 哀やはあさ沢水に鳴のこゑ | 養 | 43 | 舟ひとり明終るよのかち枕 | 巴 |
| 20 | 草ふく陰そあたり離れし | 巴 | 44 | 苦屋の波を雨にまかへて | 養 |
| 21 | 世の外と一木の花の山にきて | 金 | 45 | 立出ん方なきまゝのつれ／＼に | 金 |
| 22 | 雪やかすみのおくに残れる | 蒼 | 46 | はらへとちりのうつむ細道 | 蒼 |
| 23 | 春かけてすみやく煙風をいたみ | 養 | 47 | 古畑に臥猪のかるもかき捨て | 巴 |
| 24 | 市路のかへさ日は暮ぬめり | 金 | 48 | すめる陰さへ遠き山かつ | 養 |
| 25 | をくれたる駒も行々待つれて | 巴 | 49 | うるほへる柴焼ならし薄煙 | 蒼 |
| 26 | 心くらへはまけんともなし | 蒼 | 50 | 置こそあへね霜のむら消 | 金 |
| 27 | 難面につれなくもこそ慕つれ | 金 | 51 | 一本の枯の、中の花薄 | 養 |
| 28 | 闇の戸さしも明かたの月 | 養 | 52 | したに木ふかき松虫のこゑ | 巴 |
| 29 | 朝かほも咲やとまたき起出て | 蒼 | 53 | 身をかくす栖も秋の猶さひし | 金 |
| 30 | お花かすゑはうす霧の色 | 巴 | 54 | 誰にひらかん雲霧の窓 | 蒼 |
| 31 | 暮果ぬ鶉の床に枕かせ | 養 | 55 | 頼むよの打もねよとの月落て | 養 |
| 32 | 便もとむる旅のあはれさ | 金 | 56 | 忍ふに似たる偽はうし | 金 |
| 33 | わかいらむ道の行ゑは宇津の山 | 巴 | 57 | 花さけはとひくる人の浅茅生に | 巴 |
| 34 | 夏ををくれと茂る葉かくれ | 蒼 | 58 | すみれつむ野はひはり立也 | 養 |
| 35 | 守捨る岩まのほとり氷ゐて | 養 | 59 | 紫の霞の日影かたふきて | 蒼 |
| 36 | 網代の波に明る日の影 | 巴 | 60 | 夕の遠の山のはの雲 | 巴 |
| 37 | 小車をひくや河せの末遠み | 蒼 | 61 | うら風も雨け有とや泊舟 | 金 |
| 38 | 賀茂の祭も春過てとや | 金 | 62 | いくしほあひの沖つ白波 | 養 |
| 39 | 男山あふく峰より霞きて | 養 | 63 | 顕れしかたちのもし神慮 <small>(かみこころ)</small> | 蒼 |
| 40 | 月はふもとのわか草の露 | 巴 | 64 | いのるにも、けしきたつ人 | 巴 |
| 41 | 花を待心はたれもまたけきに | 蒼 | 65 | 恨のみつもれる中の絶々に | 金 |
| 42 | わかれも行か天つ雁かぬ | 金 | 66 | こゝらの文のけふりはかなや | 養 |

- | | | |
|----|--------------------------------|---|
| 7 | かり初のやとりに雪の降添て | 同 |
| 8 | 狩場の小野の日こそ暮ぬれ | 孝 |
| 9 | 萩薄おらぬ袖なき帰るさに | 同 |
| 10 | 虫の鳴ねそ稀になりたる | 巴 |
| 11 | 秋の風更行霜や重ぬらん | 同 |
| 12 | 砧まきすて人はねぬめり | 孝 |
| 13 | 月も漸 <small>おぼ</small> 明方近き草の戸に | 同 |
| 14 | 哀いつくの山ほとゝきす | 巴 |
| 15 | 五月雨はよと野も浪に舟とめて | 同 |
| 16 | ところ／＼のまこも刈跡 | 孝 |
| 17 | 流にやむらのさかひを分つらん | 同 |
| 18 | 田中につゝく道の一筋 | 巴 |
| 19 | 離駒いはふ方にし行つれて | 同 |
| 20 | 頼むともなくともに打ふす | 孝 |
| 21 | いはけなき使は何といひなさん | 同 |
| 22 | 忍ふ限はあふまでとこそ | 巴 |
| 23 | さかしらとかつはしる／＼遠さかり | 孝 |
| 24 | しもかしもにも猶つかへてん | 同 |
| 25 | おとろふる二人のおやに身は独 | 巴 |
| 26 | あかしの波にしつまむもうし | 同 |
| 27 | 須磨の浦や暁方の空の月 | 孝 |
| 28 | つまとふ千鳥霧にしは啼 | 同 |
| 29 | 故郷は忘れん物を袖の露 | 巴 |
| 30 | 人かへりたる山のさひしさ | 同 |
| 31 | 立もたゝしはしか程の朝市に | 孝 |
| 32 | 老たる馬や先ねふるらん | 同 |
| 33 | あたゝかになる野の草の深緑 | 巴 |
| 34 | かたへの氷流行あと | 同 |
| 35 | 棹さして舟よる春の湊河 | 孝 |
| 36 | 霞のすゑはくらき明更 <small>あけぼの</small> | 同 |
| 37 | 雁渡る翅や月をかへすらん | 巴 |
| 38 | こゝろをうつす山のはの色 | 同 |
| 39 | ふる雨も時雨めきたる秋風に | 孝 |
| 40 | 軒の板間の光さやけし | 同 |
| 41 | 蛩とふ夕は橋の方にねて | 巴 |
| 42 | 其ことゝなきおもひかなしも | 同 |
| 43 | 墨付もほのか也ける一筆に | 孝 |
| 44 | 誰かうちそひておふしたてにし | 同 |
| 45 | かしこさを生なからの習かは | 巴 |
| 46 | つきもて行に猶高き家 | 同 |
| 47 | 片岸の笥の水をせき分て | 孝 |
| 48 | なひくも散もしけき竹のは | 同 |
| 49 | 雪とたにみせぬや花の山嵐 | 巴 |
| 50 | 春の雨よは明るともなし | 同 |
| 51 | 影もたゝ雲間の月のゝとかにて | 孝 |
| 52 | かりねの夢はいかにさめつる | 同 |
| 53 | なれ／＼し中の衣もたち隔 | 巴 |
| 54 | いらんいれしの戸さしくるしき | 同 |

紹巴 五十

⑮ 永祿七甲子年正月廿二日 懷旧

- 1 消し其人のかた見や宿の梅 長慶
- 2 莓地(むらじ)かすめる月は有明 紹巴
- 3 江を遠み汀に春の雁鳴て 同
- 4 舟は流の山ちかきかけ 慶
- 5 雨はまた残る方よりくる、日に 同
- 6 風のま、なる中空の雲 同
- 7 紅葉、の散ていつくにまよふらん 同
- 8 一本たてるかたはらの松 慶
- 9 杳(ほろか)なる末の、行て里ありて 同
- 10 絶々つ、く道もみえけり 同
- 11 秋の霜消渡りたる朝朗 同
- 12 かれても残る草村の色 慶
- 13 澄のほる月に方よる虫のこゑ 同
- 14 す、みくらせる玉鉾の袖 同
- 15 待人のなきにはあらぬけしきにて 同
- 16 物おもふにや打なかむらん 慶
- 17 くせとなる泪もろさのいか斗 同
- 18 あたし心もよはひにそそふ 同
- 19 又あはむ春もたのまぬ花はおし 同
- 20 かすむ夕の友したひつ、 慶

- 21 鳴鳥の音に行空は長閑にて 同
- 22 よる波高き磯の山きは 同
- 23 ま柴たくほ影もしめるうら風に 同
- 24 人けまれなる芦の屋の道 同
- 25 草かきのあたり一入生添(ひとしお)て 同
- 26 またほに出ぬ早田おくて田 同
- 27 置露や朝な(あ)の秋の色 慶
- 28 山は日くらしおりはへて啼 慶
- 29 あつかりし空も忘る、月待て 同
- 30 かり初臥のよや更ぬらん 同
- 31 たをやめのあたの契もあかなくに 同
- 32 舟さしわたすみしま江の波 同
- 33 刈跡の菅のはつたひ水超て 同
- 34 かたはかりなるあせの細道 同
- 35 牛の子のいり日にたてる門の前 同
- 36 住家しられてなひく呉竹 同
- 37 雪晴る山をむかひの岳のへに 同
- 38 さよの時雨も明方の雲 同
- 39 いねかての枕の上に月落て 同
- 40 こぬ人ゆへの秋のかなしさ 同
- 41 みせはやの小萩うつろふ夕々 同
- 42 野となるまでもすめは住跡 同
- 43 憂身とも世にし任ておもふなよ 同
- 44 た、何こともこ、ろなりけり 同

93 独のみかりのやとりの方たかへ

巴

94 ぬき置衣身にやそへまし

慶

95 遠さかる中としもはた成初て

同

96 消しあはちの島の夕波

巴

97 風落て日もかたふきぬ海士小舟

同

98 山はむらく雪しろくみゆ

慶

99 雲間より花の梢の顕れて

同

100 松に藤さくふる寺の道

巴

長慶朝臣 五十

紹巴四十才 五十

⑰ 弘治二年三月廿四日 何路

於江州永原筑前守重興興行

1 行水やさ、れ苺(こけ)むす岩つ、し

宗養

2 雨のなこりの藤かほる山

重興

3 時鳥またれぬ春の月出て

紹巴

4 なかめをうつす夕暮の空

養

5 から衣はしめて薄き秋風に

同

6 分ているの、露の色々

巴

7 虫のねはいつれともなく鳴添て

同

8 よるの螢の明はつる影

養

9 萍(うきくさ)のすゑはは水の遠近に

巴

10 あさき流や先氷るらん

養

11 汲捨し山井の道は霜ふりて

同

12 田中につ、く片岡のむら

巴

13 啼落る雁の羽風も打かすみ

養

14 夢もおしまし明ほの、春

同

15 帰るさをうらみん花にやとかりて

巴

16 ふかき心のみえぬものは

同

17 一度はあふをおしへよ泪川

養

18 身はうたかたの哀いく程

同

19 道のへに捨をく跡の幣祓

巴

20 夕へになれば袖ほのかなり

同

21 露なから月をやまねく花薄

養

22 とふ人あらぬ故郷の秋

巴

23 長夜を添ねの夢の朝朗

巴

24 あかぬこ、ろもいやはかな、り

養

25 此世さへ忘る、物を後かけて

同

26 た、たのめとの法のうれしさ

同

27 さすらへの限はふかき憐みに

巴

28 行こそとまれあまの苦茨(くまがき)

養

29 松たてる江の水遠き夕鴉

巴

30 晴渡りたる雪の山々

同

31 秋の月時雨の後の雲消て

同

32 色なき鐘も声そ身にしむ

養

33 あたりまで野寺の道の高萱に

巴

- 34 送りも捨ぬ袖のした風
 35 もてならず扇の匂ひいか斗
 36 名乗をきかぬ行ゑかなしも
 37 物のけにかつはみえても難面や
 38 身をしつくせの命ならまし
 39 ちれはこそ花に紅葉もおしまるれ
 40 絶ぬすさひやうつしゑの跡
 41 すまの浦や侘つゝ送る明暮に
 42 つまとふ千鳥風にしは啼
 43 霜白き茅原むらく枯立て
 44 遠方人の袖のよふかさ
 45 月残る嶺の梯行雲に
 46 木すゑの秋のかけ浅き道
 47 なれきつる里遠くなる鹿のこゑ
 48 あらしや野へに吹たゆむらん
 49 松のはの入日をうすみ雨過て
 50 けふりをくゝる水の一すぢ
 51 かゝり焼よるの鶉舟の綱手縄
 52 片山陰や明残るらん
 53 むら竹のはたれになひく雪落て
 54 はらふ露をやうくひすとなく
 55 旅衣立別てのあさ霞
 56 都の方は空ものどけし
 57 秋風もしけき草木にみえ初て
- 34 養
 35 同
 36 巴
 37 養
 38 巴
 39 養
 40 同
 41 巴
 42 養
 43 巴
 44 養
 45 同
 46 巴
 47 同
 48 同
 49 養
 50 巴
 51 養
 52 同
 53 巴
 54 同
 55 同
 56 養
 57 巴
- 58 月影さひし山しなの跡
 59 春日野や薨かさなる霧の内
 60 くるれはかねの音もそひけり
 61 こき帰る波の友舟よひかはし
 62 柴おひ出る谷合のみち
 63 捨しにやおなし憂身もなくさまん
 64 よしあしきとてふたつあるやは
 65 はしめよりつかへ初しに任きて
 66 残るはまれのよもきふの陰
 67 野分せしけさまで月に蜚
 68 ねぬよおほゆるさ筵の露
 69 いつよりか秋になしぬる人心
 70 木の葉ふりしく中の通路
 71 花のえは春の隣の色みえて
 72 霜の雫を羽吹鳥のね
 73 ふむ跡もあらいそ波の真砂地に
 74 はこふもしほのけふる山もと
 75 里はたゝ夕日のすゑに遠からて
 76 吹きて涼し風のむら雨
 77 袖は猶むすふかうへの秋の露
 78 つみてくやしきわかおもひ草
 79 菊の香も昨日の跡は幽にて
 80 やとりあまたの月のみ山ち
 81 ぬるをしやつらゝの枕侘ぬらん
- 58 養
 59 巴
 60 同
 61 同
 62 同
 63 同
 64 巴
 65 巴
 66 同
 67 同
 68 同
 69 同
 70 巴
 71 同
 72 同
 73 同
 74 同
 75 同
 76 同
 77 同
 78 同
 79 同
 80 同
 81 同

- 82 風のまに／＼にあられふりきぬ 同
- 83 外面なるは広柏のまはらにて 巴
- 84 にし日なからも影はさやけし 同
- 85 秋ちかき空は雲間の浅みとり 養
- 86 うへのほりたる田上の山 同
- 87 袖つゝく河への小舟引捨て 巴
- 88 ひとり／＼にわかれ行道 同
- 89 生れあはんとは頼てもおほつかな 同
- 90 たちそふ程をせめて隔つな 養
- 91 俯をとめこし花の夕かすみ 同
- 92 かりはのきしのこゑの落草 同
- 93 打いて、駒いはふの、春さむみ 巴
- 94 ひま／＼みゆる雪の下水 養
- 95 木からしの色は岩ねに朽やらて 巴
- 96 住かたふかき山の松かき 養
- 97 鳩鳴て雨雲かゝる古畑に 同
- 98 さひしき暮をいそぐ秋の日 巴
- 99 萩のはや先ほのめかす月ならん 養
- 100 御玉しく露の木のもと 巴

〈付記〉

本稿は平成三〇年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金
課題番号・18K00286)の研究成果の一部をまとめたものである。貴
重な資料の閲覧と翻刻許可を出して下さった国立公文書館に御礼を申
し上げる。

(まつもと あさこ)／日本文学)

宗養 五十

重興 一

紹巴 四十九